

大樹町

宇宙

のまちづくりプロジェクト

近年、天気予報に欠かせない気象衛星やGPSなど衛星を活用した通信・放送サービス産業が拡大しています。多数の衛星で相互に通信を行いながら広範囲を観測するコンステレーション方式の普及により打上げられる衛星の数は増加の一途をたどっています。今、宇宙産業で熱望されているのは、衛星を宇宙に運ぶ手段。従来の大型ロケットへの相乗りではなく、顧客のタイミングに合わせて柔軟に打上げが出来る「小型ロケット」とその「射場」です。日本では昨年、民間事業者による宇宙活用の拡大を促す宇宙関連二法が制定されました。北海道大樹町に新射場を整備した場合の道内経済波及効果は年間267億円(北海道経済連合会推計)とされています。

今回編集部では、長年宇宙のまちづくりに取り組む大樹町のプロジェクトを取材してきました。

取材者 地域戦略課 日野石、高野
地域政策課 大門

宇宙の町『大樹町』これまでの歩み(抜粋)

- 1984(昭和59)年 北海道東北開発公庫(現、日本政策投資銀行)が北海道大規模航空宇宙産業基地構想を発表
- 1987(昭和62)年 北海道新長期総合計画の戦略プロジェクトに「北海道航空宇宙産業基地構想」が組み込まれる
- 1988(昭和63)年 大樹スペース研究会が設立される
- 1992(平成4)年 文部省宇宙科学研究所が大樹町で初の宇宙関連実験を行う
- 1995(平成7)年 大樹町多目的航空公園竣工1km×30mの転圧滑走路が整備される
- 1998(平成10)年 滑走路を全面舗装・ロケットで打上げ後に地上に水平着陸する無人宇宙往還機HOPEの実験実施
- 2002(平成14)年 ハイブリッドロケット初の技術実験機CAMU打上
- 2008(平成20)年 JAXAと大樹町連携協力協定締結・大気球を用いた宇宙科学実験が多く実施されるようになる
- 2011(平成23)年 SNS(株)がロケット打上実験を開始
- 2013(平成25)年 JAXA大気球世界記録更新・SNS(株)のロケット開発部門インターステラテクノロジズ(株)(以下、IST)が大樹町に事務所開設
- 2014(平成26)年 宇宙交流センターSORAがオープン。展示室・集会室を兼ねる
- 2017(平成29)年 IST社が民間初の宇宙空間到達をめざしたロケットを打上げ・打上げ後、66秒で通信が断絶したため緊急停止・目標高度100kmに対し20kmを達成

提供：インターステラテクノロジズ

昭和59年、北海道東北開発公庫

(現日本政策投資銀行)は北海道大規模航空宇宙産業基地構想を発表。

それを受けて大樹町では昭和60年に宇宙産業基地誘致活動を開始しました。それから30年間宇宙のまちづくりを進めてきた大樹町。歴代の町長は親しみを込めて「宇宙町長」と呼ばれています。

宇宙町長に聞く①

伏見 悦夫氏

宇宙のまちづくりの始まり

約30年前の大樹町にとってロケットの打上げは遠い世界の話でした。そのため、当時の町長から「宇宙産業基地を誘致する」と言われた時は困惑しました。しかし、その後色々と勉強し、世界の宇宙産業の拠点を視察させてもらう内にどんだんのめり込んでいきました。視察先の一つだったアメリカの都市ハンツビルは、もともと人口8千人ほどの街でしたが、宇宙の実験場が来ただけで巨大な施設や工科大学ができ、知的水準が高くなりました。これは将来的に大樹町も「もしかしたらひよっとするぞ」と夢が膨らみました。歴代の町長と一緒に当時の科学技術省や、NASDA(後にJAXA)に統

合)に伺いましたが、最初は全く相手にされませんでした。何度も何度も足を運ぶうちに、少しずつ顔馴染みになり、情報を教えてもらえるようになりました。

住民の反応

他の都市では地元理解に苦労していることもあります。もちろん大樹でも最初のころは「うまくいくわけない」「漁業がだめになる」という人もいましたが、初めから多くのロケットが大樹に来るわけではないし、長い期間をかけた取組も必要だと、少しずつ

説明して理解してもらいました。さらに、地元漁業関係者に色んな会議に参加してもらったり、地域を巻き込んだ取組を行っているうちに理解をいただき、応援していただける人が増えていきました。

大樹にかける夢

夢は大樹町がハンツビルのような街になること。初めてハンツビルを視察した後、夢をしたためたメモがあります。そのメモには、25年後、「大樹町は大樹市になっている」「大樹に指令塔・発射場・実験場全て備わっている」



三代目宇宙町長
伏見 悦夫氏(前町長)

る」「周辺の空港・鉄道・道路が充実し、人流・物流が活性化」「研究機関が増えて、人口が倍増」「学園都市が形成され知的水準が上昇」と描いた夢をそのまま綴っています。今、大樹で育っている子ども達にとっては、以前の子ども達



▲手書きでびっしりと書かれた伏見さん著『25年後の大樹の姿』全10ページ

よりずっと宇宙が身近になっています。昔はロケットの絵ばかりだったスペースイラストコンテストの作品も、最近では宇宙でドライブしたり酪農する様子だったり、宇宙と生活が密着してきています。あの時のメモに描いた夢の姿に少しずつ近づいている気がします。



▲毎年行われる町内のスペースイラストコンテスト。宇宙空間での日常を描く作品が増えている。

宇宙町長に聞く②

酒森 正人氏

宇宙のまちづくり

大樹町では『宇宙のまちづくり』を総合戦略の施策の一つとして掲げており、関連事業の企業誘致とそれに伴う雇用創出に向け取り組んでいます。

直近で、成功した企業誘致がインターステラテクノロジズ㈱（以下IST）です。14名ほどの社員の方がいて家族で大樹町に暮らしている方もいます。現在はIST単独でロケットを造っていますが、今後、部品造りなどを担う子会社が増えていく可能性もあ



四代目宇宙町長
酒森 正人氏（現町長）

り、宇宙関連産業の集積という面でも大いに期待しています。町では空き家を活用したテレワークの推進も行っており、多くの企業を対象にした9月のモニターツアーには、すでに宇宙関連企業もエントリーされています。

ロケット打上げと周りの理解

ロケットの打上げには、周辺住民や関係機関の方々の理解が欠かせません。特に漁業関係者の方々にとっては打上げ中、対象海域に船を出せなくなるため死活問題になります。今年7月末のロケット打上げ前には、影響のある周

辺漁協に説明に伺ったのですが、最後には「30年やってきているもんな」と納得していただきました。長年の取組がここでも生きてるのが本当にありがたいです。

実際の打上げ日には、延べ4300人の方々がロケット打上げを観るために来場されました。これによる経済効果は大樹町だけでなく、周辺市町村にも及んだようです。大樹町としては仮設トイレ・駐車場の整備で補正予算を組み対応しましたが、全局のメディアが取り上げてくれたことで宣伝効果・費用対効果は計り知れないものがあったと思います。

新たな射場候補地、大樹町

30年かけてここまで来ました。大樹町が長年宇宙産業誘致に取り組み、国が新たな射場を検討し、民間が宇宙産業に参入してきました。H-2Aなど、国家レベルのロケットは、今まで同様、種子島・内之浦（いずれも鹿児島）で打上げていくべきだと思いますが、今求められているのは民間ロケットのための新たな射場。この役割を大樹町が担っていきたくと考えています。射場の整備・運営主体をどうするかという課題がまだ残っていますが、宇宙活動法に基づく新たな認定射場の申請受付開始後は、早い段階で申請できるようにしていきたいです。

応援者に聞く

福岡 孝道氏

民間の応援団として

30年前に始まった「宇宙のまちづくり」に合わせて民間ベースでもこの動きをサポートしていこうと発足したのが「大樹スペース研究会」です。発足当初の会員数は、10人程度で、基地誘致のための勉強会や、道内外の施設視察を行っていました。

現在の主な活動は、発足当初から実施しているスペースイラストコンテストや、管内の小学生を対象にした宇宙少年団の運営ですが、先日のMOMO打上げの際には、出店を設けて物販を行ったりもしました。研究会として応



大樹スペース研究会会長
福岡 孝道氏

援できるところはほとんどんしていろいろ
と書いています。30年経ってどんな成
果があったかと言われると自信はない
のですが、研究会がある事で、行政で
も企業でもなく、住民レベルでの応援
があると内外に伝わっていきます。そ
の意味で30年続けてきてよかったと感
じています。

未来につながる夢

宇宙少年団の子ども達には常に夢を
持ち続けて、それを実現させていつて
欲しいと話しています。大人が子ども
に夢を与えようとしてもなかなか難し
いのですが、7月末のISTの打上げ
がそれをちょっと変えました。地元で
出来たロケットが地元から打上げら
れるのを実際に見ることで、彼らの夢が
さらに広がったのではないと感じてい
ます。スペース研究会もその夢や関心
に応えられるよう活動をして、将来、
宇宙少年団から宇宙飛行士や科学者が
出てほしいな思っております。

今後は宇宙の町らしいお土産品など
を作り、大樹町と宇宙をPRしていき
たいです。自分にとっても宇宙という
夢が原動力になっています。



開発者に聞く

金井 竜一朗氏

大樹の環境

全国でロケットを飛ばそうとする研
究団体や学生団体が増えていますが、
ロケットを造って打上げるまでの行為
に対し、自治体から了承をもらうこと
がとてハードルが高いので指導教員、
担当教授はどこで実験して打上げるか、
常に頭を悩ませてきたものですが、大
樹町の場合は難しいどころか「来てく
れるの！大歓迎」という受入れ体制に
なっているのでありがたいです。

MOMO打上げと今後について

先日の打上げの際は大樹町役場の方
に、関係機関との調整の手伝いや射場
周辺の環境整備など今までにないス
ピードで動いていただきました。これ
は大樹町だからやっていただけたこと



提供：インターステラテクノロジズ

▲MOMO打上げの様子

だと感謝してい
ます。当日はパ
ブリックビュー
イングと有料観
覧席を設けさせ
ていただいたの
ですが、エンジ
ニアの集まりで
ある我々IST
だけでそれらを
運営するのは到
底不可能でした。
それらはロケッ
トを飛ばすだけ
であれば、無く
ても支障がないものでしたが、あの場
が無ければ、町の人にロケットの打上
げを体験していただくチャンスがあり
ませんでした。町役場の方々・土地所
有者の方・地域おこし協力隊など多く
の関係者の皆様に協力いただき感謝し
ています。実際は音しか聞こえなかつ
たのですが、「良かった」「感動し
た」と言っていたとき嬉しかったです。
大人だけでなく小さなお子さんにも実
際打上げが行われたことで、より宇宙
やロケット開発を身近に感じて欲しい
なと思います。

今回の打上げでMOMOのスポン
サー企業だけでなく、大樹町自体の宣



インターステラテクノロジズ(株)
チーフエンジニア
金井 竜一朗氏

伝効果があることは喜ばしいことで、
大樹町の宇宙のまちづくりとISTの
ロケット開発が相互に盛り上がりつつい
くことが大事だと考えています。
国主体での打上げと違い、我々製造
メーカーが、ロケットだけ造ればいい
のではなく、前例のない様々な関係機
関との交渉や調整を行わなくてはなら
ないなど、苦労もありますが、202
0年を目前に安定的に軌道投入できる
ロケット事業を確立したいと考えてい
ます。参入障壁が高いこの業界で、
我々の先行優位性を活かす為にも、失
速しないで事業を進めていくことが大
事だと感じています。

人々が酔いしれる地をめざして

～余市町・仁木町 ワインを核とした地域創生～



伝統ある「ワインの地」余市町

北海道開拓使による各種果樹の海外からの導入に伴い、明治時代以降、本格的な果樹栽培が道内に広まりました。余市町では昭和58年に民間ワインメーカーが町内の生産者とワインぶどうの試験栽培を開始。

翌年には、生産者とワインメーカーが栽培契約を締結し、ここから余市町での本格的なワインぶどうの栽培が始まり、その後、多くの道内外のワインメーカーが余市町の生産者との契約栽培を始めるようになりました。

現在、余市町のワインぶどう収穫量は、北海道において第1位、道内収穫量のおよそ2分の1を占めています。

栽培品種としては、ケルナーやバツカスなどのドイツ系やツヴァイゲルトレーベといったオーストリア系が主となっており、近年は、栽培が難しいとされるフランス系のピノワールも収穫量が増えています。

北海道西部、積丹半島の付け根に位置する余市町と仁木町。先人達のたゆまぬ努力の結果、道内随一の果樹生産量を誇るこの地域では、先人の知恵や経験を継承し、「ワインの地」として、さらなる発展をめざす動きがあります。編集部では、余市町と仁木町を訪れ、これまでの歴史とともに「国内外が認めるワインの地」をめざして取組を進める方々からお話を伺いました。

余市町の今と 新たな「ワインの地」仁木町

余市町では、小さな規模のワイナリーでも参入可能な環境づくりのため「北のフルーツ王国よいちワイン特区」の認定を国から受けました。こうした背景もあり、余市町では近年ワインぶどうを生産する新規就農者とともに個人のワイナリー数も増加してきています。

一方、果樹の町として有名な仁木町でも平成27年、大規模ワイナリーである(株)ニシエニス ヴィレッジ、(株)ニシエニスファームの参入を皮切りに、新規就農者として移住し、同時にワイナリーをめざす方が増えつつあります。

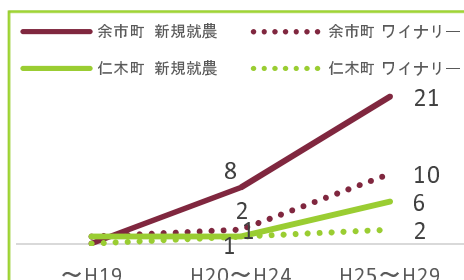
ワイン特区の概要

①地域で生産された原料で
ワインを製造する場合は、
最低製造数量基準を緩和
年間：6キロ㍓ → 2キロ㍓

②農業者が営む農家民宿等で
飲用とするため、自ら生産した
原料等で製造する場合は、
最低数量基準の適用なし

新規就農者(ワインぶどう)数・新規開設ワイナリー数の変化

年度	余市町		仁木町	
	新規就農	ワイナリー	新規就農	ワイナリー
～H19	—	1	1	—
H20～H24	8	1	0	1
H25～H29	13	8	5	1



※表(左)の数値は各年度ごとの増加数、グラフ(右)の数値は各最終年度時点の累計数

取材者
地域戦略課 七戸、高野

余市・仁木、両町の連携と ワインツーリズムプロジェクト

こうした両町の機運の到来もあり、平成27年度から、両町が連携し、「余市・仁木ワインツーリズムプロジェクト」を開始しました。

このプロジェクトでは、余市・仁木エリアのワイン観光の優位性や課題を検証し、コンパクトなエリアにワインリーが集積する地域の特性を観光資源として捉え、ぶどう農園やワイナリーを巡り、景観や飲食を楽しむといった「ワインツーリズム」を推進しています。

両町が平成28年3月に実施したモニターツアーでは、趣旨に賛同した生産者やワイナリーの協力もあり、参加者から好評を得ました。

両町では、この他にも、飲食店やタクシーと連携したツアーの開発、生産者やワイナリーが自ら開催するイベントへの支援などを行っており、今後も様々な取組を進めることとしています。

余市町・仁木町のこれからに向けて

両町では、新規就農者支援のため、就農希望者の研修のサポートや新規就農者への助成などを実施しています。

引き続き、これらの支援を行うとともにワインツーリズムでより多くの方に余市・仁木地域の魅力をワインを介して知ってもらえるよう、両町はもちろん、ぶどう農家やワイナリー、町内飲食店と連携し、取組を加速させていきます。



ワインクラスター企画のもと実施されたモニターツアー（H28.3）からリタファーム&ワイナリー（余市町）で販売されているワイン【写真上】ペリーペリーファーム（仁木町）でワインと食事を楽しむ参加者【写真下】

ワインで地域を繋ぐ人 ～ワインツーリズムの担い手に聞く～

北海道産ワインの価値を高める

我々がワインツーリズムを企画する時に重要視しているのは「ワインを通して地域の魅力を伝えること」です。

余市や仁木などであれば果樹や水産、歴史などそれらにまつわるいろいろな地域資源をワインと併せて、その地域の魅力を感じて貰えるようなツアーになるように心掛けています。

なぜならば、それが北海道産ワインの価値を高めてくれるからです。

詳しく説明すると、北海道は国内外から見るとワインでは新興の地です。

また、国外のワイン産地と比べると、ワインの生産量にも差があります。

そのため単純にポルドーやブルゴーニュなどの産地やブランドが好きな人



NPO法人ワインクラスター北海道 代表
シニアソムリエ、北海道フードマイスター

阿部 眞久 氏

に北海道のワインを勧めても意味はないし、とにかく安ければ良いという人に対しては、外国産ワインには敵いません。北海道のワインはそれらと違うやり方で価値を伝えていかなければいけません。

それは北海道が高いポテンシャルを誇る「食と観光」、また「地域のストーリー」をワインと融合させて付加価値を付けるということです。

例えば、地元で良い魚が捕れたとして、刺身でも十分美味しいとは思いますが、これをワインに合うようにポワレにして、ソースや地元の野菜を添えた一品に加工してあげる。そしてその料理に一番合う地元のワインをコーディネートし、「多少高くてもこの組み合わせを楽しんでみようかな」という動機づけに繋げていく。

これが北海道産ワインの価値創造であり、地元の食材の価値、ひいては地域全体の価値を高めていくことに繋がると思っています。

そしてその実現に向けては、飲食店やワイナリーだけがプレイヤーということでは決してなく、生産者や行政、住民も含め、地域一体となり、取組を進めていくことが重要だと思います。

ワインで地域を興す人 ~生産者・加工者に聞く~

余市



DOMAINE MONT(ドメヌ・モン)代表

山中 敦生 さん



「つくりたいのは
雨の降る国のワイン」

茨城県出身。スノーボードのインストラクターの取得をきっかけに来道。冬はインストラクター、夏はレストランで働く中で、ワインに興味を持ちソムリエ資格を取得。余市町内での研修を経て、2016年、新規就農と同時にワイナリー「ドメヌ・モン」を設立。



「一番重要なのは
ワインと食材のマリアージュ」

株式会社ユナイテッドファームズ
代表取締役

相馬 慎吾 さん

伊達市出身。札幌市の飲食店でワインサービスに携わっていたが、フランスで出会った1本のワインに感銘を受け、ワインづくりを決意。ぶどう農家であり、レストラン「ヨイッチーニ」の経営者。今後、ワイナリーも設立予定。

ワインの味は9割方ぶどうで決まります。良いぶどうをつくるためには良い気候と土地が必要です。余市は北海道の中でも日本海に面しています。夏にかけて温まった海水が、秋からの急激な温度低下を緩やかにし、霜害のリスクが軽減されます。また、ヨーロッパ系品種のぶどうは耐寒性が低いのですが、余市には日本海側から雪が安定して降り、ぶどうの樹が雪に覆われ保温されるため、凍害のリスクも少ないです。そして、寒暖の差もあるので、良質なぶどうが成熟します。何より、余市の100年以上の果樹の歴史がワイ

ンづくりの適地であることを証明しています。カリフォルニアやチリは、太陽が強く照ることで、強力な果実味を感じるぶどうができ、パワフルなワインができます。涼しくて雨の多い北海道ではそういうぶどうはつくれません。非常に繊細な味のぶどうができます。出汁に代表されるように、日本人は薄味の中にうまみを感じる繊細な舌を持っています。私は世界に通用するワインというよりは、日本人に合った、日本らしい「雨の降る国のワイン」をつくっていききたいです。

余市は、ワイン用ぶどうの生産地では道内トップであり、数十年続いている農家が多くて学ぶ機会が多いです。また、それだけ生産者が多いということは、気候条件その他全ての条件が整っている土地だということ。間違いなく余市のワインは世界でも戦えます。ただ、ワインを味わうにあたり、私が一番重要だと思えるのはワインと食材のマリアージュ(融合)です。

残念なことに、私が余市に来た時、地域にワインと地元の食材を合わせたくさんの場所がありませんでした。ワインと料理で味わってもらうため、レストラン「ヨイッチーニ」を2年前に開業しました。同じ想いを持つお店がどんどん増えてほしいです。それは結果、観光人口の流入を生み、地域に潤いを与えます。自分の理想のワインをつくりながら、余市という地域が潤うような仕掛けを作っていくこと、それが余市に来た私の果たすべき役割だと思っています。



醸造所を紹介する山中氏(左)と昨年試作したワイン(右)
山中氏の「繊細な」という表現のとおり、上品な香りで心地よい味わい



余市産のヒラメを使ったカルパッチョ(左)と店内に並ぶ余市産ワイン(右)相馬氏の語る「マリアージュ」がここに体现されている



ワインで地域を興す人 ～生産者・加工者に聞く～

仁木



株式会社 NIKIHillsヴィレッジ
株式会社 NIKIHillsファーム
副支配人 梅田明 さん

「地域のために
できることの全てを」

【NIKI Hillsヴィレッジ、NIKI Hillsファーム】
母体は広告会社、農業法人、社団法人で構成されるD A Cグループ。グループの代表・石川和則氏が仁木町の人の優しさと仁木町からの眺望に惹かれ、観光と結びつけたワイナリー事業を行うため設立。



株式会社 Le Reve Vineyard
(仁木 ル・レーヴ・ヴィンヤード)
代表取締役

本間裕康 さん

「ワインと食事で
仁木を味わって欲しい」

約16年間、札幌市で医療技術職として就労。元々ワインが好きで、国内外のワイナリーを巡るうちに、ぶどう栽培やワインづくりへの想いが強くなり、ワインづくりを決意。平成27年に仁木町へ移住し、現在、白ぶどう3種、赤ぶどう4種を栽培。

我々の目的は、地域創生とワインツーリズムの楽しさを仁木町から発信することです。
現在、2019年のグラウンドオーブンに向け、農園、醸造所・地下貯蔵室、レストラン、宿泊施設などを整備、建設しています。
これまで全く農業の経験がなかった我々は、地元の農家さんいろいろな教えてもらいながら土地を耕すところから作業を始めましたが、辛いというよりはむしろ楽しいです。

自らも新しいことにチャレンジしなければいけない」といった気風で、我々はそういう代表の想いを常に大切にしています。
将来的には、周りの農家やワイナリーさんと協力して、観光人口を増やし、一大ワインの集積地をつくりたいです。一人勝ちなんて求めてないので、どんどん周りと一緒に進みたい。地元の方を雇用したり、地域のためにできることなら全てしていきたいです。



広大なぶどう畑(右)、醸造所(左)
ワイナリー初醸造の白ワイン「HATSUYUKI」(右下)は、今年8月の日本ワインコンクールで銀賞を受賞

余市・仁木エリアはぶどう栽培やワインをつくるポテンシャルに溢れています。ぶどう栽培については道主催の研修がありますし、ワインづくりについては自分がつくりたいワインの答えを持っているワイナリーさんが余市町に絶対的。そして仁木町にはぶどう栽培に適した土地がたくさんあります。そして、ここ最近で大手企業や個人の参入も増えてきています。

う品種を使い、北海道産のすぐきれいな酸を生かしたスパークリングワインをつくってみたいという想いがあります。
また、「仁木という地域」を美味しいワインと美味しい食事で感じてもらうために、醸造所にはカフェも併設する予定で、現在、料理も勉強中です。
ワインというと余市のイメージが強いですが、ワインに興味を持った方々が「余市に行くなら仁木にも行こう」と思えるよう、周囲の方々と一体となり、地域を盛り上げていかなければいけないと思っています。



ぶどう畑(右)と植えてから2年目のぶどう(左)
栽培種類が多いので、杭にネームプレートをつけて管理

本記事の取組は、余市町企画政策課及び仁木町企画課で担当しております。